

Q22 教職員だけでは 支援が十分に行えない時には？

まずは
ここから



- 「学校だけの力で」という意識から、「地域の専門家等と共に」という発想の下、ケア会議を開催し、支援の方針を考えます。

ヒロシさん（小6）の行動が十分に理解できず、支援の方針が見出せなかった校内委員会では、地域の専門家（言語聴覚士）を要請して、支援チームの教員と共に検討を行いました。

外部の専門家の助言を活用した支援の事例について紹介します。

教室に居られなくなったヒロシさんは、教育相談室にカーテン地の布を張ってテントのようなスペースを作り、その中で過ごすようになりました。校内の支援チームは、その行動にどのような意味があるのか理解できず、支援の計画が立てられませんでした。

言語聴覚士を要請してのケア会議の開催

- 母親に対するイメージがよくないと板とかブリキのような硬い冷たい物を、母親に対するイメージがよいとカーテンやぬいぐるみのような柔らかい物を用意するようだ。布で囲っているのは、母親に対するイメージがよいと受け止めてよいのではないか。
- フラッシュバック（よくない記憶が突然よみがえること）があり、そのために、ガードを固めて安心しようとすることもあり得る。母親の育て方のせいではないということを明らかにし、家族の中での母親の立場を守るためにも、早期に医学的診断を受けた方がよい。

言語聴覚士からの
助言



児童理解を深めた上での支援を展開

専門医（児童精神科）受診
診断：アスペルガー症候群
* 現状と今後の支援について
保護者・教職員にアドバイス

親の会の集団活動プログラムに参加

学生引率の野外レクリエーションに参加

教職経験者等の地域の人材がスタッフとして参加

地域の活動に参加したり、スタッフの力を借りたりしたことで、ヒロシさんは楽しく生活が送れるようになりました。



【キーポイント】 地域の資源を発掘し活用することによって、その子の理解を深め、状態に合った支援がしやすくなります。その際、支援について共通理解を図るために、「個別の指導計画」が有効なツールとなります。